仮名手本忠臣蔵

服部幸雄 編著

監修
郡司正勝
廣末保
服部幸雄
小池章太郎
諏訪春雄

1994 白水社

写真＝吉田千秋

〈九段目〉
中村歌右衛門（戸無瀬）、
中村雀右衛門（小浪）

〈十段目〉
八代目坂東三津五郎（天川屋義平）

（ト定九郎、下手へ行きかゝる。この時、本鉄砲の音して、定九郎の[一]
り紅になり、血を吐き苦しむ事よろしくあって、トゞばったり倒れる。
時の鐘、床の合方になり、向こうより勘平、火縄を持ち出て来たり）

〽猪打ち止めしと勘平は、鉄砲提げこゝかしこ、探り廻って、

（ト勘平、よろしく定九郎の懐より金財布を引き出し、いろ〳〵あって、押し戴き行こうとするを、財布の紐定九郎の首にかゝりあるゆえ、定九郎起き上がる。勘平、この紐をたぐって、南無三と山刀[二]にて紐を切る。これにて定九郎ばったり倒れる。勘平は鉄砲を抱え、早足に花道にかゝる）

〽猪より先へ逸散に、飛ぶがごとくに。

（ト三重、[三]ごんにて、よろしく）

幕

一　舞台で用いる血。昔は蘇枋（すおう）と明礬（みょうばん）に硫黄（いおう）を入れて煮てこしらえた。後には工業用の朱に、うどん粉、ふのり、塩などを加え、衣服に付いても洗いのきくように灰汁（あく）を混ぜ、糊のように煮て作るようになった。定九郎のように口から吐き出す血は、「含み紅（べに）」といい、本紅と朱染に黒砂糖を入れて作り、小さな容器に入れて使う。この血が踏み出した白い右足の膝に垂れる。

二　山仕事などに用いる刃物。猟師、きこり、炭焼きなど山仕事をする人が用いる。

三　⇩用語集

四　下座音楽の一。銅板の楽器の銅鑼（どら）を打ち、時の鐘を表現する。「ゴン」とも「ゴン銅鑼」ともいう。

六段目　早野勘平住家の場

早野勘平
千崎弥五郎
原郷右衛門
一文字屋才兵衛[五]
ぜげんの源六[六]
猟師　三人
駕籠舁き　二人

勘平妻おかる
勘平母おかや[七]

（本舞台三間の間、藁葺き、平舞台[八]、向こう鼠壁押入れ、真中反古障[九]子、上手同じく反古張障子家体、二枚折屏風、いつもの所に門口、下[一〇]

五　京都の祇園町の遊女屋一文字屋の亭主。浄瑠璃の本文には才兵衛の名は出ない。歌舞伎が付けたもの。なお、実際の祇園には一文字屋という遊女屋はなかった。島原と伏見の撞木町（しゅもくまち）には一文字屋と称した遊女屋が実在した。現行の歌舞伎の演出では亭主は登場せず、代わって一文字屋女房お才が登場して同じ役どころをつとめている。女方の登場する場面の少ないこの狂言にあって、女方にこの役を演じさせたのが型のように定着したものであろう。

六　女衒（ぜげん）。江戸時代、女性を遊女屋や旅籠屋（はたごや）などへ売る事を業としていた者。遊女奉公では、遊女屋と女の親元との仲介にあたるが、女を誘拐して売りとばすこともあって、とかく悪徳の商売とみなされていた。遊女奉公の証文に印判を捺すことから「判人（はんにん）」とも呼ばれた。ぜげんの源六の役は浄瑠璃の本文には登場していない。歌舞伎でこしらえた役である。

七　勘平の母の名は浄瑠璃の本文には出ていない。歌舞伎でおかやという名をつけたのは、幕末であった。古くはお宮といったようだ。

八　⇩用語集

九　二重にせず、平舞台のままの家の内として道具を飾る。近代の上方の型では常足の二重にする。

一〇　本舞台の下手寄りを、門口としたり、木戸を置いたりする約束の位置とし、「いつものところ」といった。

の方に中盥、手桶、よき所に鏡台直しあり。〽みさき踊がしゅんだる程に」の唄にて幕明く）

〽麦かつ音の在郷歌、所も名におう山崎の小百姓、与一兵衛が埴生の住家、今は早野勘平が浪々の身の隠れ里、女房おかるは寝乱れし、髪の色艶すきかえし、在所に惜しき姿なり。母の齢も杖つきの、野道とぼ〳〵立ち帰り、

（ト麦つき唄にて、母おかや、世話やつし形、反古団扇を持ち、向こうより出て来る。おかる、世話女房の拵え、鏡台に向かい、髪を結って居る。母は門口より入り来て）

おかや　オヽ娘、髪結うたか。よう出来ました。イヤモウ在所はどこもかしこも麦秋時分で忙がしく、今も藪陰の若い衆が、親仁出て見やばゝん連れてと麦苅唄を唄うを聞き、親仁殿の遅いが気にかゝり、村の入口まで行ったれども、影も形も見えぬわいの。

おかる　サイナア、こりゃまあどうして遅い事じゃやら、私が一走り行て見て来ようわいな。

一　浄瑠璃の本文に「みさき踊がしゅんだる程に、親仁出て見やばゝんつ、ばゝんつれて親仁出て見やばゝんつ」と出ている。山崎近郊の在郷歌である。

二　「かつ」は臼でつくこと。麦をつく音に交じって聞こえてくる在郷歌。「在郷歌」は田舎で行われる民謡。労作歌。

三　名にふさわしく山のある山崎村。山崎山は山城国天王山の旧称。

四　赤土の「埴（はに）」で塗った住居のこと。転じて粗末なあばら家。

五　浪人の身の上。山あいの狭い土地に僅かばかりの集落があってひっそりと暮らしている時に「隠れ里」と呼んだ。平家の落人が隠れ住んだという伝承が多い。ここは勘平を落人に見立てて使った。

六　美しく艶のある寝乱れた黒髪に櫛を入れ、梳き返している姿。

七　ひなびた片田舎に住まわせておくのは惜しいと思われるほど美しく艶な姿である。

八　六十歳のこと。『礼記』に、老人が杖をついてもよい場所を、五十歳で家の中、六十歳で郷（村）、七十歳で国中、八十歳で朝廷と定めたことから、在所の野道をとぼとぼと杖をついて歩いてくるおか

おかや　いや〳〵、若い女子が独り歩行は要らぬこと、殊に其方は幼少い時から在所を歩く事さえ嫌いで、塩冶様へ御奉公にやったれど、どうでも草深い所に縁があるやら、戻りゃったが、勘平殿と二人居やれば、おとましい顔も出ぬわいの。

おかる　かゝさんとした事が、そりゃア知れた事いなあ。好いた男と添うのじゃもの、在所は愚か、貧しい暮らしでも、何の苦になりましょう。やんがて盆になって、父様出て見やかゝん連れて、という唄の通り、勘平殿とたった二人、踊り見に行きゃんしょう。お前も若い時分覚えがござんしょうがな。

おかや　この子とした事が、何を言やるぞいなあ。ハヽヽヽ。（ト思い入れ）

〽差合くらぬがら娘、気もわさ〳〵と見えにける。

なんぼそのように面白おかしゅう言やっても、心の内は。

おかる　イエ〳〵済んでござんす。主のために祇園町へ勤奉公に行くのは、かねがね覚悟の前なれど、年寄って父様のお世話やかしゃんすが。

おかや　コレ〳〵、そりゃア言やんな。小身者なれど兄も塩冶様の御家来なやの姿の表現に使った。

九　古紙で貼ったうちわ。

一〇　花道の揚幕の方。

一一　麦を取り入れる季節の意から、陰暦四、五月のことをいう。

一二　「さればいなあ」の略。女性語。相手のことばを受けて、同意する時に用いることば。そうなんですよ。

一三　どうしても辺ぴな田舎に縁があるとみえて。

一四　「うとましい」の変化した語。不愉快な顔も出ないなあ。

一五　やがて。まもなく。

一六　父（とと）様出て見や、母（かかん）連れて。在郷歌の一節。

一七　「さし合い」はさしさわりのこと。「繰（く）る」はさしさわりがあるからと考えて遠慮すること。したがって、人前では遠慮すべきことを言ったりしたりすること。父母の面前で自分の色事の話をしたりすることにいう。

一八　がさつな娘。おてんば娘。

一九　さっぱりと。陽気に。

二〇　どれほど。

二一　まもなく勘平と別れて売られて行かねばならないのを悲しく思い、心の中では沈痛な気分に沈んでいることだろう、と娘の心中を推量してやる親心の表現。

れば、外の世話するようにもないわいの。

〈一親子はなしの中道伝い、駕籠を舁かせて急ぎ来るは祇園町の一文字屋。

（トてんつゝになり、向こうよりぜげんの源六、半合羽、紺の脚絆、麻裏草履形、跡より四つ手駕籠に、一文字屋、夏羽織、帷子形にて駕籠に乗り居る。浴衣二人の駕籠舁き、これを担ぎ出て来たり、花道にて）

源六　モシ親方、向こうの内が奉公人の内でござります。

才兵衛　もう来たか。さて〳〵跡の縄手は暑い事であった。陰といっては少しもなかった。

源六　イヤモウ何、あそこは四名代の所さ。（ト思い入れ）サア駕籠の衆、向こうの家へ下ろして下さい。

駕籠舁き　かしこまりました。

（ト舞台へ来たり、駕籠を下ろす。源六、門口へ来て）

源六　お頼み申します、与一兵衛殿は内にござるかな。

〈前ページ注続き〉

三　もう悲しみは済んでいます。もはやあきらめはついています。

三一　京都市東山区祇園町。祇園社西門前の四条通りの両側で、有名な花街だった。

三二　遊女となっての年季奉公。

三三　母様が年をとった身体で父様の世話をなさるのが思いやられてつらい、の意。

三四　地位が低く、俸禄の少ない侍。

三五　寺岡平右衛門のこと。五両三人扶持の足軽の設定。「七段目」（一九一ページ）参照。

一　親と娘とが話している中へ、中道をつたって。「中」を両方にかける。

二　四本の竹を四隅の柱にし、割竹で簡単に編んで作って、小さい垂れをつけた粗末な駕籠。庶民が辻駕籠として使用した。

三　田の間の道。あぜ道、たんぼ道。たんぼ道は日陰になるところがまるでないので暑かったといっているのである。「跡の」は先（せん）の、さっきの。

四　日陰がなく暑いことで有名なところさ。

おかや　ハイ、誰でござりますな。（ト思い入れ）

（トおかやは門口を明けて、五こなしあって）

オ、これはこの間お出でなされた京のお方、遠い所をようお出でなされました。コレ〳〵娘や、京からおみえなされたぞや。

おかる　ホンニこれで父さんの安否も知れましょうわいなあ。

源六　サア親方、まあお入りなされまし。

才兵衛　ドレ、御免なされませ。ア、、今日は暑い事でござったの。

（ト内へ入り、上手へ住まう）

おかや　コレ〳〵娘、茶をおあげ申さぬか。

おかる　アイ〳〵、只今お煮花が出来ます。

（ト言いながら煙草盆を出す）

才兵衛　ア、、イヤ〳〵構わっしゃるな、構わっしゃるな。時に昨夜はきつい雷でござったのう。

（ト言いながら、おかるを見る。源六、才兵衛の袖を引き）

源六　モシ親方、どうでござります。

才兵衛　極上言い分なしの上玉だ。

源六　何とどんなものだえ。ハ、、、。（ト思い入れ）時にきのう親仁殿も、

五　ト用語集

六　このせりふによって、源六がこの家を訪ねてきたのが二度目であると知れる。前に来て身売りの下相談をして契約したのである。

七　「煮端」が正しい。煎じたての味も香りもよいお茶。

八　いままで話してきたことを離れて、気を改めて別の話題に入ろうとする時に用いる語。また、とくに注意を引きつけるための話のはじめに言う語。ここは前者。ところで。

九　激しい。

一〇　現行の上演法によると、ほとんどの場合、ここまでのところ（おかるが髪を梳くところ、帰ってきたおかやと話し合う件り、そこへ花道から一文字屋とぜげんが訪ねてくるところ）は上演せず、幕が明くと、板付き（最初から舞台に役者が出ている演出）で、一文字屋女房お才（底本の亭主才兵衛の役どころを女方でつとめる）とぜげんの源六が上手に座っている。芝居はここから始まることになる。ただし、せりふは底本とはかなり違ったものになっている。

一一　最高級で、申し分のない美女だ。「上玉」は花柳界の隠語。

暑いに御苦労でござった。そうして、別条なく戻られたかの。

おかや　エ、、そんなら親仁殿と連れ立ってではござりませぬか。きのうあんたへ行ったまゝ、今において戻られませぬわいの。

源六　ハテそれはけたいな。（ト思い入れ）そんなら、もしや稲荷前辺りで、レコにつままれはせんか。イヤそうでもあるまい。もしや外へ。

おかや　イエ〳〵。

源六　いやそんな事もござるまい。それはそうとお袋、今日同道してござったは、祇園町の親方じゃ程に、ちょっと近づきになりなさんせ。

おかや　そんならあなたが、アノ今度、娘をばお抱えなさる親方様でござりまするか。これは不思議な御縁で、このむさくるしい所へ、ようまあお出でなされました。

才兵衛　コリャ、お袋かえ。与一兵衛殿にはこの間から逢いましたが、お前には始めて。わしゃア、一文字屋才兵衛でござります。娘御の事は、かならず案じさっしゃるな。

おかや　ハイ〳〵、何分あなた様、よろしゅうお頼み申しまする。

源六　時にお袋、この間相談して極めた通り、お娘の年も丸五年、給金は百両と、さらりと手を打って、昨夜親仁殿の言うには、今夜中に渡さねばな

一 無事に。何の事故もなく。
二 あなたのところ。京祇園町の一文字屋を指していう。
三 今になっても。
四 「卦体」「怪態」と表記する。「けったい」ともいう。不審なこと。奇妙なこと。いぶかり怪しむ時に使うことば。
五 京都伏見区にある伏見稲荷神社の前あたりで。
六 「これ」を逆にした隠語的な表現で、金銭や情人、遊女などをぼかしていう時に用いた。ここは稲荷社の前で狐につままれた（化かされた）のではないか、といっているのだが、暗に伏見撞木町の遊里へ立ち寄っているのではないかと言いかけたもの。が、与一兵衛が老人であるのを思い出して、それを打ち消している。現行台本では「まさかあの年でそんな馬鹿な事もあるめえが、どこぞほかへ寄るところでもあんなさるのか」と言っている。
七 心配なさるな。
八 年季奉公の期限。約束の年限。
九 さっぱりと相談がまとまって。きれいに契約がととのって。

らぬ故、直ぐに証文認めて百両のお金お貸しなされて下されと、涙をこぼしての頼みゆえ、証文の上で半金渡し、残金は奉公人と引き替えの約束、何がその五十両を受け取るが最期、悦び勇んで戻られたは、モウ四つ過ぎでもあろうかい。夜道と言い、金を持って連れはなし、往なれるものかと、いろ〳〵と留めたを聞き入れず戻られたが、ただしは何所ぞ。

おかる　イエ〳〵寄らしゃる所は、ノウ母さん。

おかや　無いとも〳〵。ことに一時も早う其方や私に金見せて悦ばそうとて、いきせき戻らしゃるはずじゃが、合点の行かぬ。

源六　これ〳〵、合点の行かぬはそっちの詮索、こっちは残りの金渡し、奉公人を連れて行かにゃならぬ。もし親方、跡金を渡して行こう。

才兵衛　オ、、これが跡金の五十両、昨夜の五十両と都合百両、改めて渡してくりゃれ。

（ト才兵衛、縞の財布に入りし五十両を取り出して、源六に渡す）

源六　サア跡金の五十両、しっかりと渡しましたぞ。

（ト金を渡す）

おかや　左様ではござりましょうが、親仁殿の戻らしゃらぬ内は、ノウおかる。

一〇 証文を書いたその上で。
一一 「何が」は、何がさて、の略。とにかく。
一二 受けとるやいなや、すぐに。
一三 午後十時過ぎごろ。
一四 あるいは、どこかほかに立ち寄るところでもあるのか、と尋ねる気持の下略。
一五 「息急き」。息をきらすほど急いで。
一六 調べること。吟味すること。
一七 調べて。金額をあらためて。

おかる　今戻ってでござりましょう。どうぞそれまで。

源六　ハテ　ぐず〳〵と埒[一]の明かぬ。コレぐっともすっとも言われぬ与一兵衛殿の印形[二]すわった証文が物を言うわえ。今日[三]から金で買い切った体[四]、一日違ってもレコが違う。親方、どうで水放[五]れは悪うごんす。サア親方、戻りましょう。

才兵衛　成程そうじゃ。そんなら貴様、奉公人を連れて先へ行かっしゃれ。

源六　かしこまりました。サアお娘[六]行こう。アヽどうでこうせずば済むまいわい。

〈無体[八]に駕籠へ押し込み〳〵、舁[九]き上ぐる門[十]の口、鉄砲に簑笠打ちかけ、戻りかゝって見る勘平。

（トおかるを無理に駕籠へ乗せ、おかやは五十両受け取るまいとするを無理に渡し、おかるの駕籠先に、花道へ行く。源六も才兵衛も行きかける。てんつゝ[九]になり、向こう[一〇]より勘平、前幕[一一]の拵[一二]え、鉄砲に簑笠をつけ、これを担[一三]ぎ出て来たり、花道にて行き逢い、勘平おかるを見て）

一　てきぱきと物事がすすまない。
二　いやともおうとも。ただ一言も弁解のできないこと。
三　判が捺してある証文。
四　「これ」を逆にした隠語的な表現。ここは金のことを指して、指で丸を作りながら「れこ」と言う。
五　親元を離れ、あるいは夫婦が別れること。一般に親しい者の別れに使う語。
六　「おむすめ」を略したいい方。
七　どうせこのようなやり方で強引に連れて行かなければ解決しないだろう。
八　強引なやり方で。無理に。
九　下座音楽の一。三味線のテンツツをくり返す二上りの合方。人物があわただしく出入りする時に用いる。
一〇　花道の揚幕の方。
一一　五段目と同じ扮装。

勘平　ヤ、おかるじゃねえか。

おかる　勘平殿か。

勘平　コレ、駕籠に乗ってどこへ行くのじゃ。猟人[一二]の女房がお駕籠でもあるまいが。（ト思い入れ）

まあ何であろうとも、この駕籠戻して下さい。

（ト源六、駕籠を遣[一三]れというこなし。勘平、棒鼻[一四]を押し戻して、皆々舞台へ来る。おかやはそれを見て）

おかや　オヽ、勘平殿、戻らしゃってか。よい所であった。

勘平　ハイ、只今戻りました。

おかる　母[一五]さん、こちの人が戻りましたわいなあ。

（ト才兵衛は間[一六]の悪きこなし。おかる内に入る。勘平門口に腰かけ、脚絆、草履を取り居[一七]る。おかやは盥[一八]へ水を入れて出す。勘平足を洗いながら）

勘平　母者人[一九]、さて〳〵きつい雷でござりましたわいの。〔お前様[二〇]は日頃から雷嫌い、大ていお案じ申した事ではござりませぬ。〕

おかや　ほんにきつい雷であったわいの。それはそうと、どこもかしこもびっしょりになったの。

一一　おかるが駕籠に乗せられて花道を行こうとするのを、帰って来た勘平が見咎めて花道の七三で一言、二言ことばを交わすことにしたのは歌舞伎のくふうである。とくに「猟人の女房がお駕籠でもあるまいが」のせりふは、五代目尾上菊五郎の型といい、技巧的ないい方であり、いく分気取っていいながらきざにならぬようにするのが難しいとされている。団蔵型の勘平はこのせりふを言わない。
一二　↓用語集
一三　夫。妻が夫のことを称する語。
一四　母である人。「者」はあて字。子が母親を親愛の情をこめて呼ぶ時のことば。お母さん。
一五　〔　〕内に六合館本を補っておく。現行の台本にはこれに近いせりふのあるものがある。
一六　「たいてい」は下に否定の表現を伴い、状態が並大ていのことではないさまを強調して表わす。たいそう心配申したことです、の意。

勘平　折角洗濯をした着物を台なしにいたしました。（ト思い入れ）モシ母者人、あれにお出でなさるお方は、いずれのお人でござりまする。

おかや　アノお方はなあ。

（トもじ〳〵こなし）

勘平　コレおかる、どこのお方じゃ。

おかる　あの。

勘平　何だか解らぬ事じゃ。この着物は乾して置いて下されの。

（ト勘平、紋付の着物と着換え、おかやは以前の着物をちょっと見て片付ける）

コレおかる、大小持って来い。

おかる　エヽ、要らぬ事に。

勘平　エヽ、持って来いと言うに。（ト思い入れ）

（トおかるは奥へ入る。すぐに大小を持って来る。勘平、小を差して大を持ち、思い入れあって）

これにはなんぞ深い理由が、母者人、女房ども、様子聞こうかい。

〈様子聞こうと、御家の真中、どっかと座れば、ぜげんの源六、

一　すっかり駄目にしてしまいました。

二　あそこ。

三　勘平に相談せず内緒でおかるを身売りさせているので、おかるを連れに来ている一文字屋のことを言い出しかねている様子を表現する。

四　ここで勘平が紋付に着がえる型によった台本であることがわかる。すなわち、三代目尾上菊五郎から五代目菊五郎へと伝わって洗練された、いわゆる音羽屋型である。この型に従うと、ここで浅葱の羽二重の紋付（丸に違い鷹の羽の塩冶の紋がついている）に着換える（「芸談」参照）。他に、初めに着換えるのは縞の日常着で、二人侍が来てから納戸へ入って紋付に着換える型や、団蔵型のように切腹したあとで、うしろから紋服を着せかけてもらって落ち入るやり方などがある。人形は二人侍が来てから着換える演出。

五　座敷の意。

源六　さてはこんたが奉公人の御亭主か。たとえ御亭主でも、福禄寿、毘沙門かまわねえ。脇より違乱（妨げ）申す者、無之候と、親仁殿の印形が据えてあるからは、こっちは構わぬ、金を出して連れて行くのだ。五分でもこっちに引けはねえのだ。マアそう思って貰おうかい。

勘平　母者人、一円合点が参りませぬ。コリャまア、どういう理由でござりまする。

おかや　オヽ、聟殿、合点が行かぬは道理。コリャ、かねてこなたに金の要る様子、娘の咄で聞きしゆえ、どうぞ調えて進ぜたいと、思うばかりで一銭のあてもなし。そこで親仁殿の言わっしゃるには、聟殿の心の内に、女房売って金を調えようと、よもや思うてではあるまいけれど、もしまた親の手前を遠慮して居やしゃるまいものでもない。いっそこの与一兵衛が聟殿に知らさず、娘を売ろう。まさかの時は切り取りするも武士の習い、女房を売っても恥にはならぬ。お主の役に立つる金拵えてやったなら、まんざら腹も立つまいと、きのうから祇園町へ取り極めに往て、今に戻りやしゃらぬゆえ、親子案じて居る中へ、親方殿が見えて、昨夜親仁殿に半金渡し、跡金の五十両と引き替えに、娘を連れて往のう、いや〳〵遣るまいと、訳

六　あなた。対称。「こなた」の変化した語。江戸語で幕末の庶民大衆がよく使った。

七　福禄寿だろうが、毘沙門だろうが、いっこう構いやあしねえ。福禄寿、毘沙門はともに七福神に入っている福の神の名。口から出まかせをいっている。

八　いったん取りきめた契約をたがえて、脇からさまたげをする者はございません。証文の終りに書いてある文章をそのまま引いて言ったもの。底本、「違乱」の部分に貼紙をして、「妨げ」と直してある。

九　一寸の半分の長さ。物事の度合いがごくわずかであることのたとえに使う。ほんのわずかだってこっちに弱みはないのだ。「引け」は弱み、ひけ目のこと。

一〇　まったく。いっこうに。

一一　まさかそんなふうに思っていることはあるまいけれど。

一二　万一の時には。

一三　「切り取り強盗は武士のならい」という乱世の武士の行為をいう諺。「切り取り」は人を切って金品を奪いとること。

一四　必ずしも。

を言うても聴き入れず、今連れて行かっしゃる所。勘平殿、こりゃどうしたものであろうぞいのう。

勘平　それで様子ががらりとわかりました。まず以て親仁様のお志、またお前様の思し召し、女房どもが深切ありがとうござりまする。が、もう女房どもを遣りますにも及びませぬ。ちとこちらにもよい事がござりました。

おかや　よい事とは耳よりな。

おかる　どういう事でござんすぞいなあ。

勘平　よい事とは、昨夜不思議に、（ト思い入れ）

（トあたりへこなしあって、言い兼ねて）

それはマア追ってお咄し申しましょう。まず親仁殿も戻られぬのに、女房どもは渡されませぬ。

源六　これサ〳〵、金で買った奉公人が、なぜ渡されぬのだ。

勘平　母者人、あなた方は何処のお方でござります。

おかや　あなたが娘をお抱えなされた旦那様じゃわいの。

勘平　ハヽア、そんならあなたが祇園町の。

おかや　イエ〳〵、あちらの方が旦那様で、こちらのお方はお手代様じゃわいのう。

一　すっかり。
二　少々。
三　聞いて嬉しく思われる事。
四　あの人たち。
五　あの方。
六　商家で、番頭と丁稚（でっち）との間に位置する身分の使用人。ぜげんの源六は手代ではないが、おかやは適当に言ったのである。

勘平　さようでござりますか。（ト思い入れ）

（ト才兵衛に打ち向かい）

存ぜぬ事とて先刻よりの失礼、真平御免下さりませ。（ト思い入れ）何がさて、渡すの渡さぬのと申す事もござりませぬが、いわば親なり判がかり。もっとも昨夜半金の五十両渡されたでもあろうけれど。

源六　モシ〳〵ちとお詞の中でござりますが、あろうけれど、とはどうでござりまする。イヤサそれでは済みやせん。はゞかりながら判人の源六と言われりゃア、京大坂は言うに及ばず、江戸長崎までも顔の通った源六だア。仲間の者にもちっとやそっと立てられて初穂茶の一杯も呑む男だア。また親方というは、祇園町での色問屋、女護の島ほど奉公人を抱えてある遊女屋だわ。そんな横ずっぽうな事で行くのじゃアねえ。渡さざアいゝわえ、この村にも名主も大庄屋もあるだろう。サア案内しろ。お恐れながらと出にゃアならねえ。何だ、見りゃア大小を帯して、ハン、二本差しが怖くはねえぞ。二本差しが怖くては、豆腐屋の前が通れるものか。何のこったア。サア支配所へ歩みゃアがれ。

（ト判人源六立ちかゝり、きっとなるを、一文字屋止めて）

才兵衛　これさ〳〵源六、何をそんなに声高に言うのだ。大きな声をしねえ

七　言ってみれば、まだ戻られぬ親仁殿は親でもあり、判を捺した当人でもある。
八　生意気に聞こえるかも知れないが。自分を誇示する時に用いる。
九　女衒（ぜげん）と同じ。
一〇　大切にされて。
一一　誰よりも最初に飲む茶のこと。
一二　色を売る商売の問屋。比喩的な表現でこの成語はない。
一三　女性だけが住んでいるといわれる想像上の島。女性だけがいるところ――大奥や遊里のことをたとえて使うこともある。
一四　「よこぞっぽう」の変化した語。横にそれたやり方。
一五　村方三役のかしら。庄屋、肝煎（きもいり）ともいう。村政一般をつかさどる村の長。村の代表者であるとともに、領主の末端行政を担当した。
一六　地方（じかた）役人の代官・郡奉行と、村の庄屋（名主）との中間にあって、数村または二、三十カ村の庄屋を支配した在地役人。
一七　田楽豆腐を串でさして焼くことからいう。武士をののしることばに「田楽串（でんがくぐし）」がある。さしている刀を田楽の串に見立てた例である。
一八　郡代や代官のいるところ。

でもわかるこったあ。

源六　それだと言ってこんなわからない[一]掛け合いをしたかと思うと、あなたへ済みませぬ。

才兵衛　いいわえ。おれに済まねえのはもっともだが、そう声高に言ったってわからねえわえ。マア静かにするがいい。

源六　そりゃアお前さんのおっしゃる事だが、あんまりわからねえ。

（ト立ちかゝり、わめく）

才兵衛　黙れ〳〵。俺が留めるに、マア待て。俺が言う事を聞かねえのか。

源六　何、そういうわけではござりませぬが。

才兵衛　まあいゝわえ。そっちへ行っていろ。（ト思い入れ）

（トこれにて源六控える。才兵衛、思い入れあって）

ハハヽヽ。さようならあなたが奉公人の御亭主でござったか。

勘平　へイ。

才兵衛　これはあなた、始めてお目にかゝりました。

勘平　不思議な御縁で、始めて御意得[二]まする。また今日は遠方の所、わざ〳〵ようこそお出で下さりました。

才兵衛　ハイ〳〵。そんなに三つ指[三]ではいたみ入りまする。まず〳〵お手を

一　物わかりのわるい交渉。
二　お目にかかります。武士のことば。
三　三本の指。とくに親指、人さし指、中指の三本の指。その三本を軽く床につけて、ていねいに礼をすること。ていねいな挨拶のことをいう。
四　恐縮に存じます。

お上げ下され〳〵。

勘平　へイ〳〵。

才兵衛　さて只今だん〳〵[五]と源六との掛け合い、何かそこには間違いがあって、あの男も不行き届きな掛け合いをしては、俺が前に済まぬと思い、今のように声高に申しましたが、何を申すも商売ずく、お気にも障ったでござりましょうが、そこは御了簡[六]下され。

勘平　これは〳〵御挨拶で恐れ入りまする。

才兵衛　一体この事は、今源六があらまし[七]申す通り、先達[八]ってよりこゝの親仁殿が度々ござってのお頼み、手前の方にも奉公人は減らしたき程の事でござれば、なるべくは断りたい時節なれども、年寄りの頼みによって、俺が方でも取り極めをして、（ト思い入れ）マア〳〵口でこう申しても、お前方が合点が行くまい。早く解る事がある。（ト思い入れ）

（ト証文を出し）

俺が方にはこの通りの証文が取ってあります。年季の事は五年で百両、半金渡して五十両。

（トこの内、勘平思い入れあって）

勘平　旦那様、その証文をちょっと見せて下さりませ。

五　いろいろと。あれやこれやと。
六　分別してこらえて下さい。我慢して許して下さい。
七　おおよそのこと。
八　私どもの方、すなわち一文字屋としても、の意。

才兵衛　あの、この証文かな。
勘平　どうぞちょっと。
才兵衛　ハイ。（ト思い入れ）サア見なされ。（ト思い入れ）
（ト証文を出す。取って読み、おかやに向かい）
勘平　母者人、この印形[一]は親仁様のに相違ござりませぬかな。
おかや　相違ないわいの。
勘平　さようなら、親仁様のに相違ござりませぬな。（ト思い入れ）
（ト思い入れあって）
成程親与一兵衛の印形に相違ござりませぬ。
（ト証文を才兵衛に返す）
才兵衛　そんなら、親仁殿の印形に違いござりませぬな。（ト思い入れ）そこでお聞きなされい。約束の五十両、親仁殿に渡したら、悦び勇んで手拭へぐる〳〵と巻いて行くから、それはあぶない、俺が下着の出切[二]で財布を二つ拵えたが、一つは俺が持って来たその財布の中へ入れて、首へ掛けて行きなせえと貸してやったが、すぐに戻ると言わるゝから、待ちなせえ、もうかれこれ五[三]つ過ぎでもあろう。夜道を一人であぶない。今夜は泊って、翌日[四]の朝帰らっせえと言うのを、振り切って戻られたは、おゝかた四つで

一　おかやは目が悪くて文字が読めないという設定で、おかるに証文を渡して印形を確認させる演出も行われる。
二　衣服などを作るのに使う布を切った後に残ったはんぱの部分。裁（た）ちあまりの布きれ。
原作の浄瑠璃では、「おれが着ているこの単物（ひとえもの）の縞の切れでこしらえた金財布貸したれば」とあり、一文字屋亭主が着ている着物の共切れで作った財布を与一兵衛に貸したことになっている。現行台本は底本と同様の演り方で、お才が持っている財布と同じものを貸したという設定である。「芸談」参照。
三　午後八時すぎごろ。
四　午後十時ごろ。

もあったろうか。
（ト勘平は財布へ目をつけ、煙管を落とし、心付き）
勘平　ヘエ、さようならあなた、何とおっしゃる。その財布を与一兵衛におお貸しなされましたか。
才兵衛　オヽ、その財布を貸して進ぜた。
勘平　アノ、その縞の。（ト思い入れ）ちょっとお見せ下さりませぬか。
才兵衛　さあ見さっしゃれ。
（ト勘平に貸して渡す）
勘平　女房ども、茶をひとつくりゃれ。
おかる　アイ。
へそこらあたりへ眼を配り、袂の財布見合わせば、寸分違わぬ[五]糸入縞[六]。南無三宝[七]、さては昨夜鉄砲で打ち殺したは舅[八]であったか。はっとばかりにせつなき思い。
（トおかる茶を汲んで来る。勘平茶を呑む風にて、文句のとおりよろしくあって、茶にむせる。おかる背中をさすり）

五　ほんのわずかのちがいもない。まったく同じの。
六　絹糸を木綿の中にまぜて縞に織った織物。「糸縞」ともいう。
七　「しまった」「失敗した」という時に、思わず発することば。
八　つらく悲しい胸のうち。

モシ、茶にむせなさんしたかえ。

勘平　もうよい〳〵。

〳〵とは知らずして女房は、

おかる　コレこちの人、そわ〳〵せずと、遣るものか遣らぬものか、分別して下さんせいな。

勘平　成程、あのようにたしかに言わるゝからは、行きゃらずばなるまいわい。

おかる　あの、父さんに逢わいでも。

勘平　イヤ〳〵親仁様には今朝ちょっと逢うたが、まだ〳〵戻りは知れまいわえ。

おかる　エ。（ト思い入れ）母さん、父さんに逢うたといのう。

おかや　そんなら、親仁殿に逢わっしゃったか。嬉しや〳〵。コレ娘、親仁殿に逢うたといのう。

おかる　サア、逢うたら逢うたと、こちの人も早う言うたがよいわいの。

おかや　モシあなた、聟殿が親仁殿に逢うたと申しまする。

一　妻から夫をいう語。あなた。
二　一文字屋へ私を行かせるのか行かせないのか、判断してきめて下さい。「分別」は理性的に考えを決すること。

源六　それ見なせえな。七度尋ねて人を疑えじゃ。親仁殿の様子が知れたので、安堵さっしゃったであろう。俺まで落ち付いた。この上は四の五のがあれば、出処の沙汰にせにゃアならぬ。聟どんが逢うたので、事柄がわかってこのようなめでたい事はねえ。

才兵衛　コレお袋、六条参りにござったら、必ず尋ねて寄らっしゃれ。祇園町の中程じゃ。（ト思い入れ）アノ、これ〳〵お連れ合い、こなたも暇の折にはちょこ〳〵ござらっしゃれ。ハテ、その折には逢わしまするわえ。

アヽ、とこう言う内モウ片陰が出来たであろう。帰り道でも五里余り、サア〳〵源六、仕度しやれ〳〵。

源六　かしこまりました。サアお娘、行きましょう。

（トこれにておかるは立ち兼ねる）

おかる　ハイ、参りまするが、少しの間お待ちなされて下さりませ。

源六　アヽ、ある奴だが、どうで別れは悪い物だ。（ト思い入れ）旦那、表で待ちましょう。

（ト才兵衛、源六、門口へ出て立ちかゝり居る。おかる門口を閉め、合方になり、おかる勘平の傍へ来たり）

おかる　母さん、モウ参らねばなりませぬ。コレ勘平殿、年寄った二人の親、

三　「七たびたずねて人疑え」という諺。物をなくしたような時には、何回も念を入れてたずねたのちに人を疑えということ。いきなり人を疑うような軽率な行動をいましめたもの。
四　安心。
五　あれこれと文句があるなら。
六　「出処（でんど）」は出頭すべきところ。公儀。役所。公儀に訴えて出て、しかるべき処置をしてもらわねばならない、の意。
七　老母の敬称。
八　京都の六条通りにある東西の本願寺への参詣。
九　あれこれと言ううちに。
一〇　一方が物の陰になっているところ。日陰。夕方になり、暑い夏の野道にも日陰が出来ているだろうといったもの。
一一　そうやって家族との別れを悲しんで、ぐずぐずしていつまでも時間を延ばすということはよくあることだが、の意。
一二　⇨用語集

どうでお前のみんな世話、取り分けて父さんはきつい持病、気を付けて下さんせえ。

〈親の死目を露知らず、頼む不憫さいじらしさ、母は傍へさし寄って、

おかや　オヽ、聟殿、夫婦の別れ暇乞いしたかろうけれども、そなたに未練な気も出ようかと思うての事であろ。

おかる　イエ〳〵なんぼう別れても、主のために身を売るは、悲しゅうも何ともござんせぬ。わたしゃ勇んで参りまする。したが、父さんに逢わずに行くのが。

おかや　オヽ、それも戻らっしゃったら、ツイ逢いに行かっしゃろうぞいの。随分煩わぬように灸すえて、息災な顔見せに来てたも。オヽ、オヽ、そなたに持たしてやる物がある。（ト思い入れ）

（ト立ちかゝり、手文庫を出し）

コレ、この鼻紙、扇もなけりゃ不自由な、何にもよいかや。とばついて怪我せぬように。そしてこれはそなたの合茶じゃ。朝夕呑みゃ。またわが身に言って置かねばならぬのは、廓という所は、その心中立てとやらに指も

一 どっちみち。どうせ。
二 かくべつ。
三 激しい持病。「持病」は完治しにくく、つねに悩み苦しむ病気のこと。
四 親が死んだこともいっこうに知らないで、自分が居なくなった後の世話を頼むふびんさいじらしさはたとえようがない。「不憫」はかわいそうなこと。「いじらしさ」は心や姿がいたいたしく憐れむべきさま。
五 「そなた」は二人称だが、ここではおかるを指している。お前に未練な気が出るといけないと考えて、いとまごいもせず、じっとこらえておられるのであろう。
六 しかし。
七 「何としても心残りでなりませぬ」というのを、人前をはばかって飲みこんだいい方。
八 すぐに逢いに行かれるだろうよ。
九 漢方療法。もぐさを肌の局部につけて火をつけ、その熱気によって病気を治療する方法。やいと。
一〇 元気な。すこやかな。
一一 手箱として使う文庫。
一二 何も忘れたものはないか。
一三 足がよろめいて、ふらふらすること。

切らねばならぬそうな。そういう時には、髪切るとも、指など切ってたもるなや。また酒なぞも過ごしもせまいが、ま一つ飲めと勧めても、深う飲んでやんなや。なろう事なら私は嫌いでござりますと断り言や。（ト思い入れ）アヽ、何の因果で人並みな娘を持って、この悲しみを見る事じゃぞいのう。

〈歯を喰いしばり泣きければ、

おかる　母さん、もう〳〵何にも言って下さんすな。言う程未練が起こる。

勘平殿、そんならもう行くぞえ。（ト思い入れ）さらばでござんす。

（トつか〳〵と行きかけると）

勘平　おかる、待ちゃ。

おかる　何でござんす。

（トツカ〳〵と勘平の傍へ来る）

〈いっそ打ち明けありのまま、話さんにも他人ありと、心を痛め居たりける。

一四 体質によく合うお茶。「合薬」といういい方になった語。茶を薬のように考えたのであろう。
一五 男女が誓いを立ててたがいの愛情を守り通し、他へ心を移さぬこと。また、その証拠を示すこと。
一六 遊客が酒をすすめることをいう。
一七 どうした不仕合わせなめぐりあわせで。前世の悪業の報いとして現世の不幸があるとする仏教の因果応報説にもとづく考え方。
一八 何のむくいで十人並みの娘をもちながら、人並みの暮らしをさせることができず、こんな悲しい目にあわせねばならないのだろうか。
一九 言えば言うほど。
二〇 早足の様子。小走りに。

勘平　まめ[一]で居やれ。

おかる　ハア、、、。

（ト泣き伏す。源六、内に入り）

源六　サア〳〵、どうで水放[二]れは悪いものだ。早く駕籠に乗らっしゃれ〳〵。

〽情けなくも駕籠舁き上げ、道を早めて急ぎ行く。

（トおかる駕籠に乗り、才兵衛、源六よろしくあって付き添い、向こうへ入る。おかやは後を見送り）

おかや　アヽコリャ、必ず内の事を案じて煩[四]わしゃるな。そうして、今言うた事忘れずに、短気な事してたもんなや。灸も忘れまいぞ。アヽこれ〳〵、まそっと顔見せてたも。アヽコレ、もう行きゃったか。ハア、、、。（ト思い入れ）アヽ、よ[六]しない事で愚痴[七]が出ました。アヽ、山[八]へ行け〳〵。鶴亀[九]〳〵。（ト思い入れ）

（ト言いながら小戸[五]りして内へ入り、勘平を見て）

ムヽ、こな[一〇]人わいの。親の身でさえ思い切りがよいに、女房の事ぐずぐ〳〵思うて煩うて下さるな。こなたひとりがこれからは、おれ[一一]も親仁様もたよりじゃぞえ。（ト思い入れ）それはそうと、この親仁殿はまだ戻らっしゃらぬ事かいの。イヤこなたたしかに逢[一二]うたと言わっしゃったの。オヽ、どこで逢わっしゃった。サヽ言って聞かして〳〵。

（ト傍へ寄り、こなしあって聞く）

勘平　エヽ、成程アノ、お目にかゝりました。

おかや　そりゃどこで逢わっしゃった。どこへ別れて行かっしゃったぞ。

勘平　サア、そのお別れ申した所は、

おかや　別れさっしゃった所は、

勘平　アノ鳥羽、イヤ伏[一三]見。

〽淀[一四]、竹田[一五]、口[一六]から出まかせめっぽう弥八、種が島の六、狸[一七]の角兵衛、所の猟人[一八]三人連れ、親仁の死骸に簑[一九]打ちかけて戸板に乗せ、どや〳〵と打ち連れ内に入り、

（ト向こうより猟人三人、山達付[二〇]、筒袖形[二一]、頭巾[二二]、山刀を帯し、鉄砲を持ち、与一兵衛の死骸に簑をかけ戸板に乗せ、すぐに内へ入り、下

一　達者で居なさい。「まめ」は息災、丈夫のこと。
二　肉親との別離はあっさりいかないものだ。
三　花道の揚幕の方。
四　病気になるんじゃないぞ。
五　もうすこし。
六　つまらないことで。
七　言っても甲斐のないことを言って歎くこと。
八　不詳。
九　不吉なことなどを払いのける縁起なおしのために唱えることば。「山へ行け」も同様の呪文か。
一〇　「ここなる人」の転。ここは勘平に向かって呼びかけた語。
一一　自称の「おれ」（俺）は、中世以降に使われ、とくに近世以降に多用された。現在は男性だけが用いるが、江戸時代の中ごろまでは貴賤男女の区別なく使われていた。目上にも目下にも用いた。この例は女性が目下に対することばの中で使っている。
一二　山城国紀伊郡の土地。現在の京都市南区と伏見区にまたがる地。
一三　山城国紀伊郡の土地。現在の京都市伏見区。
一四　山城国久世郡の土地。現在の京都市伏見区の地名。賀茂・桂・宇治の三川の合流点にある。

一五　山城国紀伊郡の土地。現在の京都市伏見区。山に囲まれた竹田盆地にある。
一六　口から出まかせにでたらめをしゃべるという意味を、人の名の「滅法弥八」にかけた。「滅法やたら」「めったやたら」を洒落て人名化したのが「滅法弥八」。
一七　「山裁着（やまたっつけ）」の宛字。裁着袴（たっつけばかま）の一種で、猟師が用いるもの。
一八　山岡頭巾と呼ぶ、猟師やきこりがかぶる頭巾を指している。
一九　猟師やきこりが山仕事をする時に使う刃物。
二〇　現行の音羽屋型の演出では下手ではなく二重の上の上手奥へ持って行く。

手へ死骸を置き）

弥八　サア〳〵、夜山仕舞うて戻りがけ、こゝな親仁殿が殺されて居られたゆえ。

三人　猟人仲間が連れて来ました。

おかや　アノ皆の衆とした事が、またいつものように酒飲まして担いで来たのであろ。それならそれと言うたがよい。こっちにもチト気の揉める事がござる。おどけも大概に言うたがよいわいのう。

三人　イヤおどけじゃござらぬ。仏でござるわいのう。

おかや　エヽ、まだ言わっしゃるかいの。（卜思い入れ）

（卜勘平、この内じゅつなき思い入れ。三人捨てぜりふにておかやを死骸の傍へ突きやる。おかやは何心なく死骸にかけし簑を取り、見てびっくりなし）

〽見るよりはっと驚く母、

ヤ、コリャ何者の仕業じゃ。コレ聟殿、殺した奴は何者じゃ。敵を取って下されいのう。

一　夜の狩猟をやめての帰り道。
二　この内の。
三　ちょっと心配なこと。
四　ふざけ。たわむれ。
五　ほどほどに。「いいかげんにしておいてくれ」と非難する口吻。
六　「おどけ」を「ほとけ」と洒落た。「仏」は死んでいる与一兵衛のこと。
七　「術なし」。どうしようもなく、つらい。苦しい。
八　日用語集
九　その効果もなく。「無く」を「泣く」にかけた。
一〇　「歴とした」。身分や家柄がしっかりとしていて、世間に認められていることをいう。いいかげんでない、きちんとした。
一一　何が何でも。
一二　代官がつめていて事務を行った役所。「代官」は江戸時代に幕府直轄の地を支配して、年貢や訴訟をつかさどった地方官吏である。
一三　加勢をして鉄砲を打つこと。助太刀してやる、の意になる。
一四　死後の極楽往生を願う信心深い心。また、功徳（くどく）になる慈悲深い気持を持っていること。
一五　意外な。妙な。思いがけない非業の死に方をさして言う。
一六　一向に。まったく。

〽のうコレ与一兵衛殿と、呼べど叫べどその甲斐も、泣くより外の事ぞなき。猟人どもは口々に、

弥八　オヽお袋、悲しかろ。泣かっしゃるは道理々々。コレお袋、こゝな聟殿ももとはれっきとした武士の浪人じゃげな。

六　そんなれば、こっちも猶強みじゃ程に、何でも代官所へ願うて敵を討って貰わっしゃれ。

角兵衛　もしそんな事があったなら、わしらも寄って助鉄砲でも打ってやりましょうぞや。

弥八　時になあ、仲間の衆や、常から後生気なこのこゝな親仁殿、ひょんな事をしましたのう。

六　あのように平常から信心しられても、こういう時にはとんと役には立たぬものじゃ。ただ可哀そうなは、こゝなお袋。

角兵衛　それ〳〵、与一兵衛殿が亡くなられては、蠟燭のない提燈じゃ。

二人　そりゃ何の事じゃ。

角兵衛　ハテ、とぼす事が出来ぬじゃないかい。

一七　謎かけのことば。注一八でその解が示されている。
一八　「とぼす」は一般的には蠟燭や燈心に火を点（とも）すの意味だから、「蠟燭のない提燈には火をともすことができない」の意味になる。その「とぼす」は、江戸語では男女が性交をするという意味にも用いたので、ここはそちらを解として、「旦那の与一兵衛がなくなったので、もう性交ができない」と悲ふざけを言ったのである。これも歌舞伎の入れ事である。

二人　エヽ、何を言わっしゃる。

三人　アヽ、笑止々々。

〈笑止〳〵と打ち連れて、皆々我が家へ立ち帰る。

（ト三人よろしくあって向こうへ入る）

おかや　これ〳〵、親仁殿が殺されて居るわいのう。誰が殺した、親仁殿イのう、〳〵。

〈母は涙のひまよりも、勘平が傍へ立ち寄りて、

（ト母は死骸に取り付きいろ〳〵あって、とゞ勘平の傍へ来たり、思い入れあって）

コレ聟殿、よもや〳〵とは思えども、合点の行かぬ。なんぼう以前が武士じゃとて、舅の死目見やしゃったらびっくりもしやるはず。こなた道で逢うた時、金受け取りはさっしゃらぬか。イヤ親仁殿が何と言わっしゃれた。サア言わっしゃれ。サア何と。（ト思い入れ）どうも返事はあるまいがの。

一　気の毒なこと。同情すべきこと。

二　ひ用語集。ここは夫の急死に遭って残されたおかやの心情を察しやって、同情する気持を表現する。

三　涙の絶え間に。涙の出ない時に。

四　ひ用語集

五　まさかまさか。下に否定の意をともない、まさかそんなことはあるまいという否定的な予測を表現する。

六　すっきりと了解できない。

七　いくら以前武士だったから気丈だとは言っても。

八　あなた。対称。

九　どうもこうも。何とも返事はできまい。

ない証拠は、コレこゝに。（ト思い入れ）

〈勘平が懐へ、手をさし入れて引き出せば、

（トおかや、勘平の懐中へ手を差し入れる。そして財布を引き出す）

先にちらりと見て置いたこの財布、コレ血の付いてあるからは、こなたが親仁殿を殺さっしゃったの。

（ト勘平の胸倉を取り、こづき廻して）

勘平　イヤそれは。

おかや　それはとは、エヽ吐かしおるな、〳〵。こなたはのう、〳〵、隠しても隠されぬ、天道様が見透かしだ。親仁殿を殺して取ったその金は、誰にやる金じゃ。（ト思い入れ）ムヽ、聞こえた。身貧な舅、娘を売ったその金を中で半分くすねて置いて、皆やるまいと思うて、取ったのじゃな。今という今までも、律義な人じゃと思うて騙されたか。腹が立つ、腹が立つわえ。エヽ、こゝな人でなしめが。あんまり悶れて涙さえ出ぬわいやい。

（ト思い入れ）

一〇　むなもと。人を倒そうとしたり、捕えようとしたりして、相手の胸を強くつかむことを「胸倉をとる」という。「胸倉をつかむ」とも。

一一　太陽のこと。天地を支配する神。「おてんとうさま」ともいう。

一二　わけがわかった。理解できた。

一三　貧乏人。

一四　途中で半分かすめ取っておいて。「くすねる」は、こっそりと物をかすめ取ること。ごまかして自分のものにすること。

一五　正直で義理がたい人。

一六　人非人め。人らしくない行いをする人。恩義や人情を解さない人をいう。「ここな……め」は、人や物をののしっていう時、その人や物をさして、ののしりの意を強調する語。「この人非人めが」と勘平をののしり、怒りをぶつける激しい表現である。

〈のういとしや与一兵衛殿。

畜生の様なる聟とは知らず、どうぞ元の侍にしてやりたいと、年寄って夜の目も寝ずに、京三界を駆け歩き、身代を投げうって世話さっしゃれたも、却ってこなたの身の仇となったるか。飼い犬に手を嚙まれ、ようも〳〵このように、むごたらしゅう殺された事じゃのう。コリャ、こゝな鬼よ蛇よ、親仁殿を生けて戻せやい。

〈遠慮会釈も荒男の、髻を摑んで引き寄せ〳〵叩き付け、ずた〳〵に切りさいなんでも、何のこれで腹が癒えようぞいやい。

〈恨みの数々口説き立て、かっぱと伏して泣き居たる。身の誤りに勘平も、五体に熱湯の汗を流し、畳に喰いつき天罰と、思い知ったる折こそあれ、深編笠の侍二人。

（ト向こうより、原郷右衛門、千崎弥五郎、野袴、割羽織、大小、深編笠にて出て来たり、花道にてよろしくあって）

〈徐々と入り来たり。

（ト両人門口へ来て）

郷右　早野勘平、在宿召さるか。原郷右衛門。

弥五郎　千崎弥五郎。

両人　御意得に参った。

〈折悪けれど勘平は、

勘平　母者人、表に誰やら案内がござりまする。

おかや　おのれ逃がそうか。

（ト勘平にむしゃぶり付くをなだめ）

勘平　逃げは致しませぬ、〳〵。しっかりと取り付いてござりませ。（ト思い入れ）

一　かわいそうな。ふびんなことよ。

二　京都くんだり。「三界」は「境（さかい）」の変化した語という。

三　財産。浄瑠璃の本文は「珍財（ちんざい）を投げ打って」とある。「珍財」は「珍しい財宝」の意味で、大切な金銭のこと。

四　自分の身にとって害を与えるもの。

五　朝夕恩をかけてやった者のために、かえって害を受けることのたとえ。

六　生き返らせて。蘇生させて。ちなみに、大声で呼んで蘇生させることを「呼び生ける」といった。

七　遠慮も会釈もあらず、を「荒男」にかけた。「会釈」は相手の心を思いやること。

八　頭髪を頭上で束ねたところ。もとどり。

九　むごたらしく切って責めても。

一〇　どうしてこの程度のことで恨みが晴れてさっぱりすることがあろう。

一一　くどくどと恨み言を言い立て。

一二　全身。総身。

一三　天が与えた罰。

一四　人目を避けるために、顔を隠すように深くつくった編笠。

一五　原郷右衛門と千崎弥五郎の二人が訪ねてくる。これを「二人侍（にんざむらい）」と通称する。

一六　ゆっくりと。

一七　家に居られるか。

一八　お目にかかりに来た。

一九　激しい勢いで、しゃにむに嚙（かじ）りつくこと。

二〇　ひ用語集。ここは同輩の手前もあり、また逃げるのではないかなどと思われて母親に縋りつかれる身になってしまって、情けないという気持を思い入れで表わす。

〈腰ふさぎ脇ばさんで出で迎い、

（卜勘平、おかやを腰脇へ付け、刀を持ち、門口を開け、両人を見て）

ム、、ハ、、、。これは〳〵御両人ともに見苦しき茅屋へようこそ御入来。

郷右　見れば家内に取り込みのある様子。

勘平　アイヤ、ずんど些細な内証事、お構いなくとも、いざまずあれへお通り下され。

両人　しからば御免下されい。

〈玄関なけれど敷居は武士の礼儀と知られたり。二人が前に両手を突き、

勘平　この度殿様の御大事にはずれたるは、拙者が重々の誤り、申し開かん詞とてもなし。何卒某が科御赦免を蒙り、亡君の御年忌、諸家中諸共に相勤めまする様に御両所のお執り成し、ひとえに願い奉る。

一　粗末な刀を脇にはさみもって。一時の間に合わせにただ腰をふさぐばかりの粗末な刀を「腰ふさぎ」という。

二　荒れ果てた粗末な家。

三　他人の来訪を敬っていう語。おいでになること。おこし。

四　ごたごたすること。とくに家内に凶事や祝い事があって、混雑することに使うことが多い。

五　「ずんど」は程度のはなはだしいことにいう語。ごくごく。きわだって。

六　内輪のもめごと。

七　きちんとした玄関もない粗末なあばら家だけれども、敷居があるものとして、外で案内を乞い、挨拶をして家の中に入るのは、武士としての礼儀であると知れる。

八　弁解。いいわけ。

九　人の死後、毎年巡ってくる祥月命日。またその日に行う法要のこと。亡き主君の法要なので「御」をつけて敬った。

一〇　藩の人たちとともに。

一一　取りはからい。とりもち。

〈身をへりくだり述べければ、郷右衛門取りあえず、

郷右　一二まず以て其方、一三貯えなき浪人の身として、多くの金子御一四石碑料に調達せられし段、由良之助殿はなはだ感じ入られしが、一五石碑を営むは一六亡君の御菩提、殿に不義不忠をせし其方の金子を以て御石碑の料に用いられんは、御尊霊の御心にもかなうまじとあって、金子は封のまゝ戻さるゝ。弥五郎殿、ソレ。

弥五郎　心得ました。

〈詞の内より弥五郎は、懐中より金取り出し、勘平が前にさし置けば、

勘平　スリャ、この金子は御用には立ちませぬか。（卜思い入れ）アノ、御用には、ホ、ホイ。

〈はっとばかりに気も転倒、一七母は涙と諸共に、

おかや　コリャ、こゝな大悪人めが。今という今、親の罰思い知りおったる

一二　まず。「もって」は添えた語で、とくに意味はない。

一三　金銭のたくわえ。

一四　石碑を建てるための費用としてととのえて納められたことについて。

一五　石碑を作ること。

一六　なくなった主君の尊霊を極楽浄土に往生していただくための行為である。

一七　常態を失って、狼狽（ろうばい）すること。

か。お二人様、聞いて下さりませ。親仁殿が年寄って、後生[一]の事は思わずに、聟のために娘を売り、金調えて戻らっしゃるを待ち伏せして、殺して取った金じゃもの、天道様がなくばいざ知らず、なんで御用に立つものぞ。ハイ〳〵、あなた方の手にかけて、嬲り殺しにして下さりませ。わしゃ腹が立って腹が立ってならぬわえ。

〈身を投げ伏して泣き居たる。聞くに驚く二人は、刀おっ取り左手右手に詰めかけ〳〵、弥五郎は声荒く、

弥五郎　ヤイ勘平、非義非道[三]の金取って、身の科の詫びせよとは、この弥五郎が申したか。われがような人非人、武士の道は耳にも入るまい。親同然の舅を殺し、金を盗んだ重罪人、大身鎗[四]の田楽ざし[五]、拙者が手料理[六]振舞いくれん。

〈はったと白眼めば郷右衛門、

郷右　ヤレ、弥五郎殿待たっしゃい。貴殿の詞もっともなれど、お下[七]にござ

一　来世に極楽往生を遂げること。
二　左と右と。「ゆんで」は弓をもつ手、左手のこと。「めて」は「馬手」で、馬の手綱をもつ手、右手のこと。
三　義からはずれ、道に反すること。人間のふみ行うべき道からはずれること。
四　大身の槍。刃わたりの長い大きい槍。
五　田楽豆腐の串のように、槍や刀で突き通して殺すこと。大身槍を串に見立て、お前を田楽刺しにして殺してしまう、の意。
六　自分の手で作る料理。「田楽ざし」の縁語。「手料理を振舞ってやろう」で、おれの手で殺してやろうという意味。「振舞う」はもてなす、馳走する。
七　「お下（しも）」は畳など座るべきところ。「お下にござれ」は、「まあそこに座って、落ちつくがいい」とたしなめる時に使う常套のことば。

れ。（ト思い入れ）コリャヤイ勘平、渇[八]しても盗泉の水を飲まずとは義者[九]のいましめ、舅を殺し取ったる金、亡君の御用金になるべきか。生得[一〇]汝が不忠不義の根性にて調えたる金子と推察あって戻されし大星殿の眼力、ハヽア。

〈ハヽアあっぱれ、恐れ入る。

ただ情けなきはこの事世上[一一]に流布あって、アレ見よ、塩冶判官の家来早野勘平、非義非道を行いしと言わば、汝ばかりの恥辱にあらず、亡君の御恥辱と知らざるか。白痴[一二]者め。さほど[一三]の事を弁えなき汝にてはなかりしが、いかなる天魔の魅入りしか。チエヽエヽヽ、情けなき魂じゃナア。（ト思い入れ）弥五郎殿、いかように申せばとて牛[一四]に経文、詞[一五]交わすも身の穢れ、旅宿へ帰宅いたそう。

弥五郎　さよう仕ろう。イザ、郷右衛門殿。

（ト両人立ち上がり、行きかけるを、勘平両人を引き留め）

勘平　御両所〳〵、暫く〳〵。亡君の御恥辱とあれば、一[一六]通り申し開かん。まず御両所ともにお下[一七]にござって、お聞きなされて下さりませ。（ト思い

八　清廉な人間は、どんなに困窮していても、不正な財をむさぼらないというたとえ。『文選』にある「渇しても盗泉の水を飲まず。熱しても悪木の陰に息（やす）まず」から出た諺である。
九　正義を重んずる人がみずからいましめとすべきこと。
一〇　生まれつき。
一一　世間に知れわたって。
一二　その程度のことを理解していないお前ではなかったはずなのに。
一三　いかなる悪魔がとりついて、そんな悪心を起こさせたのだろうか。
一四　諺。「牛に向かって経を説く」。どんなにありがたい話をしてみても、何も反応もありはしないことのたとえ。「馬の耳に念仏」と同意。「牛に説法、馬に銭」ともいう。
一五　たがいにことばを交わすだけでも、自分の身がけがれてしまう。
一六　ひととおり言いわけをしましょう。
一七　お座り下さって。ここは目上に向かって願った文脈。

入れ）夜前弥五郎殿にお目にかかり、別れて帰る道々も、金の工面にとやかくと、心も暗きくらまぎれ、山越す猪に出逢い、二つ玉の強薬、切って放せば過たずたしかに手応え、駆け寄り見ればこは如何に、猪にはあらで旅の人、南無三宝薬はなきかと懐中を探し見れば、手に当たりしは金財布、ア、道ならぬ事とは知りながら、天より我へ与うる金と押し戴き、直ぐに追っ付き貴殿にお手渡し致し、徒党の数に入りたると、悦び勇んで内へ帰り、様子を聞けば情けなや、金は女房を売った金、打ち留めたるは、

両人　打ち留めたるは、

（ト勘平、刀を抜き、腹へ突き立てる）

勘平　舅殿。

両人　何と。

（ト竹笛入り合方になり）

勘平　如何なればこそ勘平は、三左衛門の嫡子と生まれ、十五の年より御近習勤め、百五十石頂戴なし、代々塩冶の御扶持を受け、束の間御恩を忘れぬに、色にふけったばっかりに、大事の場所にも居り合わさず、その天罰で心を砕き、御仇討ちの連判に加わりたさに調達なしたる、金もかえって石瓦、いすかの嘴程くい違う、言い訳なさに勘平が、切腹なしたる身の成

一 つごう。算段。くふうして金銭を集めること。
二 どうしようかこうしようかと考えてもいいくふうはつかず、心は暗澹としてまっくらな状態で、暗闇の中で。
三 四一ページ注三〇参照。
四 これはいったいどうしたことだろう。意外なことにひどく驚きあきれた時に発することば。
五 下座音楽の一。竹笛入りの合方は、手負いの述懐のようにしんみりとした場面に用いる。
六 「いかなればこそ勘平は」から「金もかえって石瓦」までは浄瑠璃の本文にはない。歌舞伎で作ったせりふである。
七 実子。
八 伝統の習慣で、ここは「せき」と発音することになっている。
九 ほんのわずかの時間だって。
一〇 色事に深入りしすぎたために。おかるとの恋、とくに塩冶判官の殿中刃傷の時、ただ一人供として付いていっていたのに、たまたま逢ったおかるとと情事にふけっていてその場に居合わせなかったことを悔んでいる。
一一 やることなすことがちぐはぐになり、思ったとおりにならないことのたとえ。鵖（いすか）はス

りゆき、御両所とも御推量下されい。

へ血走る眼に無念の涙、仔細を聞くより弥五郎ずんど立ち上がり、死骸引き上げ打ち返し、疵口改め、

弥五郎　コレ見られよ、鉄砲疵には似たれども、コリャこれ刀でえぐりし疵。

郷右　ドレ。（ト思い入れ）

（ト郷右衛門、ツカ〳〵と寄って死骸を見て）

イヤ何、千崎氏、これにて思い当たりしは、貴殿にも見られし通り、此家へ参る道端に、鉄砲受けたる旅人の死骸、立ち寄り見れば斧定九郎、強欲非道な親九太夫さえ見限って勘当なしたるあぶれもの、身のたゝずみなきゆえに山賊窃盗をなすと聞きしが、疑いもなく勘平の舅を討ったは定九郎が仕業であったよな。コリャ勘平、早まった事いたしたなあ。

へと言うに手負いも見てびっくり、母も驚くばかりなり。

おかや　そんならアノ親仁殿を殺したのは、聟殿ではござりませぬか。

ズメ科の小鳥で、上下のくちばしが曲がっていて、うまく合わず交差してしまう。「嘴」はくちばし。ここは浄瑠璃の本文によっている。現行台本では「いすかの嘴とくい違う」。
一三 すっくと。突然に動作が行われる時に使う。
一四 欲深く、人の道を知らない。
一五 見込みがないものとして見はなす。見切りをつけること。
一六 ならず者。ごろつき。
一七 置きどころ。生活。くらし。
一八 傷を負った者。ここは切腹した勘平。歌舞伎には「手負い」になってからの「手負いの芸」と呼ぶ演技の類型もある。

両人　いかにも。

おかや　コレ聟殿、手を合わして拝みます。年寄りの愚痴[二]な心から、恨み言うたは皆誤り、こらえて下され、勘平殿。必ず死んで下さるな。

〈泣き詫ぶれば、顔振り上げ、

勘平　母人お疑いは晴れましたか。御両所とも御疑念は晴れましたか。

両人　いかにも晴れ申した。

勘平　エヽ、忝い。我が望み達したり。母人歎いて下さるな。舅御のご最期も、女房の奉公も反古[三]にはならぬこの金子、一味徒党の御用金、早く〳〵。

〈と言うに母も涙ながら、財布と共に二包み、二人が前に差し出し、

おかや　勘平殿の魂の入ったこの財布、聟殿じゃと思うて敵討ちの御供に連れてござって下さりませ。

（ト以前の返せし金を一諸に差し出す）

郷右　思えば〳〵この金は、縞[四]の財布の紫摩黄金。

一　そのとおりだ。
二　理非のわからぬ心。
三　むだにはならない。「反古になる」は役に立たないものになってしまうこと。無駄になってしまうこと。
四　「紫摩黄金」は紫色をした純度の高い黄金のこと。「縞」と「紫摩」は頭韻をふんである。
五　人の死後四十九日目の法要。四十九日の間は、中有あるいは中陰と呼び、死者がいまだ未来の生を受けていないとする。四十九日（七七日）はとくに重要として、僧を呼んで法要を営む。この四十九日から五十両を導き、一文字屋がもって来た五十両と勘平の五十両とを合わせて百両とつづけ、これを百カ日の追善供養の法事を営むための費用にせよ、の意。次の郷右衛門のせりふと割りぜりふにしてある。
六　人の死後百日目の仏事法要。百日忌。
七　真心をこめてていねいに。
八　成仏せよ。「仏果」は現世で善行を行ったことの結果として、来世で成仏すること。
九　「魂魄」はたましい。成仏を嫌い、魂が現世にとどまって敵討ちの供をしないでおこうか、と言う勘平は、いわゆる御霊に変身することを宣言したことになる。四段目の塩冶判官の切腹（一〇四ページ注五参照）と思い合わせると興味深い。

弥五郎　聟と舅の七七日[五]、四十九日や五十両、

郷右　合わせて百両百ケ日[六]の追善供養、跡ねんごろに弔うは老母の役。（ト思い入れ）ただこの上は仏果を得よや。

両人　早野勘平。

勘平　ヤア仏果とは穢らわしや。死なぬ〳〵。魂魄[九]この土に止まって、敵討ちの御供なさで措くべきか。

〈言う声もはや四苦八苦[一〇]、母は涙にかきくれて、

おかや　コレ勘平殿、この事を娘に知らして、せめて死目に只一目、コレどうぞ逢わして遣りたいわえ。

勘平　イヤ〳〵、親仁殿の最期といい、勘平が死んだ事は、必ず知らせて下さるな。お主[一一]のために売ったる女房、この事聞いて不奉公[一二]せば、お主に不忠するも同然、我が悪名も晴れたれば、跡より追っ付き舅殿、死出三途[一四]を供なさん。

〈突っ込む刃引き廻せば、

一〇　人間のあらゆる苦痛の称。「四苦」は生苦、老苦、病苦、死苦。八苦は四苦に、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦の四つを加えたもの。ここは大変な苦痛をすること。
一一　悲しみに沈んで。
一二　亡君塩冶判官をさしている。
一三　つとめをおこたること。主人のためにしっかりと奉公しないこと。
一四　死出の山と三途の川と。転じて冥土のこと。

郷右　ヤレ、引き廻すな勘平、息ある内に見するものあり。（ト思い入れ）

弥五郎殿、ソレ。（ト思い入れ）

（ト弥五郎、門口を開け、あたりへ思い入れあって）

〽懐中より一巻取り出し、さら〳〵と押し開き、

この度亡君の敵高師直討ち取らんと神文を取り交わし、一味徒党の連判状。

〽読みも終らず、

勘平　シテ姓名は誰々なるぞ。

弥五郎　大星殿を初めとして、徒党の人数は四十五人。

郷右　今また其方をさし加え、一味の義士は四十六人、これを冥途の土産とせよ。

勘平　ム、。

一「いちかん」と発言する。ここは巻物の形式になっている一味の連判状。

二　嘘、いつわりのないことを神仏に対して誓約して血判した証文。

三　読み終らないうちに。

四　このあと、七段目でおかるの兄寺岡平右衛門を一味に加える件りがあるため、勘平を四十六人目としたのである。

五　死んでいく者に与えられる名誉。

〽懐中の矢立取り出し、姓名を書き記し、

（ト連判状へ姓名を記し）

両人　勘平血判。

勘平　心得た。

〽心得たりと腹十文字に掻き切って、臓腑を摑んでしっかと捺し、

（ト勘平よろしく臓腑を摑み出し、連判状へ捺す。郷右衛門取り上げ納めて）

郷右　血判たしかに、

両人　受け取った。

〽あわれはかなき。

（ト本釣鐘。この内郷右衛門、弥五郎思い入れあって門口へ出る。勘平、引き廻したる刀にて咽喉をかく。おかやは、取り縋り愁いのこな

六　携帯用の筆記具。腰にさしてもち歩いた。墨壺に筆をいれた筒をつけて、帯にはさむようになっている。

七　盟約をする形式として、指などに傷をつけ、血で印の代わりに捺すこと。

八　切腹の法式で、横に引きまわした後、縦に切ること。

九　はらわた。五臓六腑のこと。

一〇　いま錯誤によって、忠義の心を残したまま死んでいく勘平に対して、あわれではかない人生よ、と詠歎する地の詞である。

一一　下座の鳴物の一。「本釣」ともいう。小型の釣鐘を撞木で打ち、本当の釣鐘の鳴る効果を出す。実際の時を示すときにも使うが、とくに時刻とかかわらず、凄みのある夕暮れや夜更けの感じを表わし、無常やあわれさ、さびしさのムードをかもし出すときに用いられることも多い。「暮六つ」のようにその両方が一体になってゴーンと「本釣」を入れることもある。

一二　咽喉笛をかき切る。

し。この仕組み、勘平は落ち入る。[二]双方よろしく[三]三重にて）

幕

一 絶命する。
二 門口の外に出て、上手に向かい合掌する二人侍と、内で落ち入る勘平およびこれに取り縋って泣くおかやの双方。
三 ⇨用語集

大星由良之助
同　力弥
寺岡平右衛門
斧九太夫
鷺坂伴内
矢間重太郎
千崎弥五郎
竹森喜多八
一力の亭主
[五]幇間大勢
駕籠舁き二人
[六]仲居大勢
[七]傾城おかる

七段目　祇園[四]一力[四]の場

四 京都市東山区八坂神社の西門前の四条通りの両側、大和大路までを祇園町といい、江戸時代には私娼街であった。現在、京都の代表的な花街であり、一力茶屋では三月二十日に大石忌を行っている。
五 「ほうかん」「たいこもち」とも。「幇頭」とも書く。遊客に従って、その機嫌をとり結び、芸をし、酒興を助けることを職業とする男。男芸者ともいった。
六 遊廓や料理屋で客を接待し世話をする女性。
七 「けいせい」は遊女のこと。もと中国の『漢書』に出ていることばで、絶世の美女の色香におぼれて、城や国を傾け滅ぼしてしまうことから、美女のことをいった。「傾国」ともいう。のちに遊女を指すことばとなって一般に用いられた。ここでは、祇園一文字屋の抱え遊女となったおかるのこと。